

エディトリアル

川崎市立多摩病院救急災害医療センター 副センター長 田中 拓

人がいれば転びます。高齢者が転べばケガをします。

地域の医師に期待される役割は多様である。高齢者の日常を診ている地域の、いわゆる内科系の多くの医師にとって、専門診療科とは異なるが、最低限の、できれば一定の質を保ったケガ(外傷)の診療が求められることがある。特に高齢者では、一見軽微な受傷機転が重篤なケガにつながることも多く、若者のケガよりも慎重な視点が必要である。ケガも内因性疾患と同様に、急性期から慢性期へ、予防 → 治療 → リハビリ、ADLの維持を一連のものとして捉えなくてはならない。もちろんすでに通常の診療としてケガの対応をされている医師、施設も多いと思う。本特集においては、普段からケガに対応している医師にも、そして、これからケガへの対応にニーズを感じている医師にも参考となるよう、高齢者を対象として、さまざまなケガを知っている方に執筆をいただいた。

岩田充永論文では高齢者特有のフレイルを背景とした筋力低下や活動性の低下、それによる易転倒性や注意の散漫など高齢者であることから起こる外傷の増加と、特徴について示されている。ケガの後のADLの低下もしばしば経験することであり、ケガの治療の一環と考えるべきである。

橋元球一論文では高齢者に大変多い脆弱性を背景とした骨折について、実際の症例をもとに解説いただいている。超音波による骨折の診断にも言及されており、今後の診療に活用してみたい。

盛實篤史論文では特に頭部外傷について、地域の医療機関でも意識状態、受傷機転といった画像以前の臨床判断のポイントについて、さまざまなガイドラインを参考に示されている。頭部CTを求めて患者を転院搬送するか否か、地域診療所での葛藤時に参考となる。

夏井 陸論文では創傷を皮膚の機能という観点を踏まえてその治療について示されている。創傷治癒の機序、軟膏の意味と役割、特に高齢者でよく目にする皮膚剥離創について、実例を示しながら分かりやすく詳述されている。

加藤博己論文では予防に焦点を当てて示されている。介護老人保健施設における転倒予防の取り組みを内的要因、外的要因に分け、さらに施設入所からの期間による注意点が解説されている。施設のみならず、在宅でも必要な心理面、環境面でのポイントは大変参考となる。

ケガをした時、患者はすぐにいつもの診療所に駆け込んでくる。医師はその患者に適切に対応する。地域を支える医師は困ったら何でも相談できる窓口である。目前の外傷で困った時に本特集が一助となれば幸いである。